



本草書にみえる虎

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大形, 徹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004597

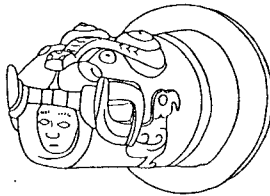
本草書にみえる虎

大形 徹

一、悪鬼を食らう虎

中国の古代において虎はかなり重要な扱いをうけていた。仰韶文化の河南濮陽西水坡遺跡（紀元前四五〇年頃）45号墓にすでに虎と龍が形象化されている。墓主人の遺体をかこみ、蚌かきすがいの殻で虎と龍があらわされている。^① 同墓には、上記とは別に、龍に騎のりる人の姿もある。後世、龍は天に登るとされることが多い。その特性を考えると、この時代にすでに龍は魂を天界に運ぶものであったように思われる。一方、虎は、魂のぬけたあとの遺体に入りこもうとする悪鬼をはらう役割をはたしていたと考えられる。

殷代に入ってから、乳虎人占は虎が悪鬼を食らう造形であり、林巳奈夫氏紹介の饕餮も同様である。饕餮は貪欲な悪獣とされるが、^②「饕餮の一部には「虎」の文字が使われており、これも本来、悪鬼を駆逐



鬼を食べる饕餮、林巳奈夫「殷中期に由来する鬼神」（東方学報第41冊1970）13頁



饕餮文（西清古鑑）

する神獣であろう。^③ その後、虎は墓室の壁画、墓前の石獸、鏡の紋様などにあらわれる。いずれも悪鬼を追いはらうという役割を果たしていると思われる。^④ 『統漢書』礼儀志、大雉の注では、鬼門の門番の神荼・鬱壘が、悪鬼をつかまえ虎に食わせる話をしるし、「虎は陽物、百獸の長、能く鷄性を撃ち、魍魎を食らう物なり」とのべられる。



鬼門の門神、神荼と虎（『南陽漢代画像磚』
文物出版社、1988年）

甲骨文の虎・龍・鳳はいずれも冠飾をつけ、のちに玄武をくわえて四神へと発展していく。龍や鳳凰は注目されることが多い。けれども虎に関しては、それほど論ぜられていない。龍や鳳は空想上の動物であるが、虎は実在のものであるということが、その原因のひとつであろう。

『論語』では「暴虎馮河（述而篇）」といい、『礼記』では「苛政は虎よりも猛なり」とされ、また善政をおこなったために虎がその地を去ったという話がある。これらの儒教系の話では虎の神性は失われ、たんに人に危害をくわえる猛獣としてあつかわれるに過ぎ

ない。

けれども本草書の中では虎は、悪鬼をおいはらうという役割を忠実に守っている。古代、悪鬼が体内に侵入して疾病がおこると考えられていた。この原理によれば体内から悪鬼を追いはらえば病は治る。ここにおいて虎が薬物として登場する。虎を服用することによって体内の悪鬼を駆逐しうるとされたのである。小論では本草書のなかにあらわれる虎に焦点をしばって論じたい。

二、本草書の虎

『名医別録』の記述

最古の本草書『神農本草経』には「虎」はあらわれない。しかし『名医別録』（梁、陶弘景集、尚志鈞輯校）（以下、『別録』と略称）では、つぎのように記述されている。

虎骨は邪悪の気を除き、鬼疰の毒を殺し、驚悸を止め、悪瘡、鼠瘻を治することを主る。頭骨尤も良し。膏、狗の嚙瘡を治す。爪、悪魅を辟く。肉は悪心嘔かんと欲するを治し、氣力を益す。又、尿は悪瘡を治す。其の眼睛は癩を治す。其の屎中の骨灰は火瘡を治す。牙は丈夫の陰頭の瘡及び疽瘻を治す。鼻は癩疾、小兒の癩を治す。

本草書としては『別録』にみえる虎の記述がもっともふるい。こ

ここでは邪悪気を除き、悪魅を辟けるものとしてあらわされている。後世の本草書も基本的にこの枠組みにもとづきながら、さまざまな説を付加していくことになる。

驚悸は「びっくりして動悸はげしくなること」である。これは魂がぬけることと関連するよう思われる。小児の顛癇もまた一種の脱魂現象であろう。隋、巢元方撰『諸病源候論』巻四六、六一「為鬼所持候」には「小児は神氣軟弱、精爽微羸にして、神魂は鬼の持録する所を被る」と、悪鬼が小児の魂を捕まえていくという表現がみえる。魂がぬけることは死を意味するが、ここは虎の威力によつて悪鬼を追いはらう方法とみなされるだろう。

悪瘡は、かさ・できものの類をいう。悪瘡には悪鬼が入りこんでいると考えられた。『五十二病方』には呪文を併用した治療法が多数、記されている。呪文は悪鬼をいはらう善神を呼び出したり、悪鬼をおどしついたりすることばである。また豚の膏など臭いの強いものを塗り、火であぶり、針や小刀で刺したり切ったりして中の悪鬼を追いはらおうとする。ここでは虎は使われていないが、腫れ物を爪で云々は虎につながる話であろう。

ここからは虎の各部位にわけて考察を加えたい。その際、『別録』の記述にもとづきながら、後世の本草書で付加されていく部分に着目して考察をすすめたい。

虎



虎肉味酸平無毒主惡心欲嘔益氣力食之入山
 虎見則畏辟三十六種魅○虎眼睛主瘡疥辟惡
 止小兒熱驚○虎骨主除邪惡氣殺鬼疰毒止驚
 悸主惡瘡鼠癩頭骨尤良

頭骨

『別録』は虎骨の効能から説きはじめるが、「頭骨もつとも良し」と頭骨が特別祝されている。ここでは頭骨の意味から考察したい。人の場合、頭骨は本来、魂が入っていた場所と意識されていた。死によつて頭骨を離れた靈魂も、ふたたびそこに依りつくと考えられた。そのことから中国の古代では頭骨信仰がおこなわれていたようだ。動物の場合もまた同様に考えられたのではないか。悪鬼（悪靈）を追いはらうには、やはり靈魂にたよらねばならない。神もまた靈魂である。ここは虎の頭骨によりつく虎の靈魂によつて悪鬼を追い

『飲膳正要』（元、忽思慧撰）にも本草書と同様の記述がみえる。

はらうのであろう。悪鬼は体内に入りこみ疾病をおこす。そこで虎の頭骨を服用し、体内の悪霊を追いはらう。

唐、蘇敬等撰『唐・新修本草』（顕慶二年「六五七年」）（以下『新修本草』）は、「俗に云う」として

虎頭もて枕を作れば悪魔を辟く。戸上に置かば鬼を辟く。という。

ほかに宋、唐慎微『重修政和証類本草』（大觀二年「一一〇八年」）卷十七「虎骨」は、張文仲を引用して、

卒かに壓するを療するに虎の頭骨を以て枕と為す。という。

これらは内服するわけではない。呪術的な効果を期待してのことである。

虎の枕のことは晉、葛洪（二八三〜三四三）の『肘後備急方』にみえる。悪夢をさけるために、

虎頭の枕を以てす。尤も佳し（治卒壓寐不寤方第五）。とされる。

同卷二には「虎頭殺鬼方」を記す。

虎頭骨五兩、朱砂、雄黄、雌黄各一兩半、鬼白、阜茨、蕪荑各一兩、搗き篩ふるい、蜚蜜を以て和し彈丸の如くし、絳囊もて貯え臂に繫げ、男は左、女は右にす。家中、屋の四角よづかに懸く。月の

朔望の夜半に中庭に一丸を焼く。一方、菖蒲、藜蘆有り。虎頭・鬼白・阜茨無し。散を作り之れを帯ぶ。

これらの薬物もまた服用しない。丸薬にして臂にかける。あるいは散薬にして身に帯びる。虎を薬物として利用することは、こういった身体の外部に佩びる方法がさきにあったのかもしれない。なお絳い囊いぶきにいれて臂にかける方法は『統齊諧記』にみえる。

悪魔は悪夢にうなされること。魂が睡眠中に一時、肉体を離脱することが夢だと考えられていた。遊離した魂が悪鬼に出くわすことが悪魔であろう。『諸病源候論』卷二三、九魔不寤候には「人、眠睡すれば、則ち魂魄外遊し、鬼邪の壓屈する所と為る」と、夢中に魂が離脱し、悪鬼に連れさられることを記す。

また甲骨文の「𣦵」は悪夢にうなされて死ぬことしとされる。魂は頭の凶門から抜けると考えられたようだが枕は頭に用いるものである。枕によりつく虎の靈魂で悪霊を追いはらうのであろう。

なお虎の頭を枕にする話は、宋、趙令時撰『侯鯖錄』にこうみえる。

李広、臥虎を射。其の頭を断ち枕と為し、銅を鑄て其の形を象り、洩器と為す。今に至るまで洩器、之れを虎子と謂い、或いは虎枕と為す。

李広は漢の武帝の時に活躍した將軍である。弓が得意で「草中の

石を見て、虎だと思い、射たところ石にあたり、鏃が石にめりこんだ」という有名な話がある。⁽²⁰⁾

なおここでは虎子が渡器であることをのべるが人の頭蓋骨を溺器としたという話もある。⁽²¹⁾

また殷の時代に虎の枕をつくったという話がある。宋、高承撰『事物紀原』、舟車帷幄部、虎枕は、

西京雜記に曰く、「李広、兄と冥山の北に遊獵し、猛虎を見、一矢もて之れを斃す。其の頭を断ち、枕と為し服を示すなり」と。

と。事始記、為えらく、「虎枕の始め、魏の咸熙中、梁冀の玉虎枕を得る。臆下に題有りて曰く、『帝辛九年』と。帝辛は即ち紂なり。是れ則ち商紂の時、已に其の制有り」と。

この話によれば、殷の紂王の時にすでに玉で作った虎の枕があったという。

虎の頭骨を戸上にかけることは犬の磔や祭鼻の習俗と同様の意味をもつと思われる。のちには虎の絵や虎の字を門戸に貼るようになる。

虎骨

虎骨は實際上、もっとも重要な薬とされている。『新修本草』・唐、孫思邈撰『千金翼方』は、ほぼ『別錄』と同じ。ただし『新修本草』の「俗に云う」の部分では「骨、朱を雜え符を書す」とみえ



虎骨（難波恒夫編『原色和漢薬図鑑』）

る。骨を碎いて朱と混ぜて道教の符を書す時に用いるのだろう。符は悪鬼を追いはらったり、使役するとき用いられることが多い。それにも虎の骨が有効だという。『本草綱目』では「初生の小兒煎湯もて之れを浴びれば、悪気を辟け、瘡疥・驚癇・鬼疰を去り、長大にして病無し」とする。これも辟邪の効用である。

明、陳嘉謨撰『本草蒙筌』では、

虎骨。味は辛。気微かに熱。無毒。各処の山林に俱に有り。色黄、雄なる者、佳と為す。

という。雄がよいのは陰陽思想の関係であろう。当然、雄が陽である。

務めて薬箭の中り傷つくるに非ざるを審らかにし（薬箭もて射死する者は、薬に入る可からず。薬毒の骨血の間に浸潰し、甚だ能く人を害するを恐る。必ず綱「網？」もて捕殺し死する者を得て方に用う）、纒かに酥油を取り塗り腕を炙る。

毒矢によって殺傷した虎は用いてはならないという。毒矢の毒に

あたることを恐れてのことである。さらに続けて、

湯液を煎すること勿かれ。惟だ散・丸を製するのみ。畏る所の三葉、須らく蜀漆・蜀椒・磁石と知るべし。風痺を治するに用う。乃ち虎嘯き風従うに因る。膝痠を補するに用う。祇だ虎の走力健なるに縁る。邪疰を殺し、上焦驚悸するを止む。

という。これは薬物として実際に使用されていく過程での経験を記していると思われる。

また「虎嘯風従」と「風」との関係から「風痺」を結びつける。虎が嘯く、つまり吼えたと風がおこる。これは「虎嘯きて谷風至り、龍拳がりて景雲属す（『淮南子』天文訓）」など数多くみえる表現である。これらの例では、たんなる「風」である。しかし、ここでは病気にかんする「風」つまり風邪と結びつけられている。また虎と龍が対として表現されることが多いが、ここでは龍とは切りはなされている。

膝の痛みを治すことは、虎の脚力がすぐれていることと関連する。脚力がすぐれるのは、虎の骨がつよいからである。

脛骨

「脛骨」に対しては「覓むるに堪ゆ」ときわめて簡単である。しかし「脛骨」という項目は『別録』や『新修本草』にはなかったものである。陳嘉謨はこう付け加える。

按ずるに「古人、虎潜丸を立つ。方中、虎の脛骨を用うること一味、其の理、甚だ優雅なり。蓋し虎は金なり。陰に属す。風は木なり。陽に属す。虎嘯し風従う。乃ち木、金の制を被れば然らざるを得ざるなり。故に凡そ脚膝拘攣し、癱瘓痠痛等の証、骨を用い調治すれば、即ち能く風を追い痛を定む。此れ又た陰出で陽藏るるの義なり。況んや虎は一身の筋節力氣、皆な前足の脛の中より出づ。其の性氣俱に藏る。人毎に之れを用う。名づけて虎潜と曰う所以なり。今人別骨を用うるは、則ち虎潜の義に非ざるなり。

虎骨のうち、とくに脛の骨が有効だという。虎の威力が肢、とくに獲物を繋す前肢に集約されるからであろう。それが膝の治療と結びつけられていく。『本草綱目』でも、

煮汁もて之れを浴びれば、骨折の風毒腫を去る。醋すゐを和し膝に浸さば、脚の痛腫を止む。脛骨尤も良し。

とされる。これは頭骨の重視とは異なる感覚である。

興味深いのは陰陽五行の觀念である。「虎は金なり」は次のような考えにもとづく。虎は四神の一、白虎に通ずる。白虎は西に配当される。五行思想は四神とからんだ場合、中央が土、東が木、南が火、西が金、北が水となる。「陰に属す」のは青龍と白虎の關係によるのだろうか。別の箇所では虎は陽とされている。虎は「風は木

なり。陽に属す」と対立する位置にある。木は東であり、西の白虎と対面する。木が陽であれば、金（虎）は陰となる。ここではなぜか龍のことはあらわれない。風はたんなる「風」と病気を引き起こす「風邪」の意味の両方に掛け合わせている。

威骨

骨に関しては「威骨」というものがある。

威骨は脇の両傍に在り（虎威に骨有り。乙の字の如し。長さ一寸。肉を破り之れを取る。尾端にも亦た有り、脇の者に如かず）。之れを帯ぶれば日に威勢を添う。

「脇」と「脅」は月と劬とらから構成され、基本的に同じ文字である。脇は「わき」だが、脅は「おびやかす」の意味をもつ。ゆえに脇の骨は脅威をあたえる骨という事になる。それを身に帯びると虎の威が身につくという。一種の類感呪術である。『本草綱目』では、陳蔵器の説を引き、「之れを帯び、官に臨むに佳し。官無ければ則ち人の憎む所と為る」とつけ加えている。

虎の骨と、他の骨たとえば豚の骨では成分にそれほどかわりがあるとは思えない。虎であることに意味があるのだろうか。

膏

『別録』では「狗の癩瘡を治す」とある。『本草綱目』では、「主治」狗の癩瘡（別録）。下部に納るれば五痔下血を治む

（孟詵）。之れを服さば反胃を治む。煎消し小児の頭瘡白禿に塗る（時珍）。〔附方〕一切の反胃。

とする。本来、塗り薬であったようだが、ここでは服用も行なわれている。膏自体は『五十二病方』に豚の膏が多数みえる。

爪

『別録』では「爪、悪魅を辟く」とされる。『新修本草』では「爪、多く以て小児の臂に系くれば、悪鬼を辟く」とされる。小児の魂が悪鬼につれさられやすいことと関連するであろう。

『本草綱目』では、

爪（頌曰）、爪並びに指・骨・毛俱に用うるべし。雄虎を以て勝れりと為すと。〔主治〕小児の臂に系くれば、悪魅を辟く（別録）（〔時珍曰〕、外台、悪魅を辟くるに、虎爪・蟹爪・赤朱・雄黄を以て末と為し、松脂もて丸に和し、正旦（正月）に之れを焚く）。

とされる。

「虎の能く狗を伏せしむる所以のものは爪牙なり（『韓非子』二柄篇）」と、爪と牙は虎のもっとも強力な武器である。これが爪が薬用とされるもっとも大きな理由であろう。

『神農本草経』で丹砂（赤朱）は「精魅、邪悪鬼を殺す」とされ、雄黄も「精物・悪鬼・邪氣・百蠱毒を殺す」という。いずれも悪鬼

をさける薬物。丹砂に関してはさらに来歴がふるい。蟹の爪つめというのは、爪が蟹の武器であることからの発想であろう。

ここでは薬物を正旦に焼いた。煙によって、目にみえない鬼を追いはらう。原理的には蚊遣りと同じ。『日書』にも同様の方法がみえる。讎の儀式にも丹砂の粉をまぶした赤丸をまいた。これも服用しない。いわば消毒のための薬物撤布で一種の予防医学ということになる。

なお爪や牙は身につけて魔除けとする例があり、勾玉などもそれに由来するとされる。

肉

虎の肉は「悪心嘔かんと欲するを治し、氣力を益す（『別録』）」とされたが、『新修本草』の「俗云」では「虎肉を熱食すれば、人の歯を壊す」という。虎は陽であり、陽をさらに火（陽）で熱することはよくないという考えかたであろう。

『本草蒙筌』では「肌肉を吸食すれば、力を益し、嘔悪を止むること尤も靈なり」という。力を益すのは虎の力を体内にとりこむという発想であろう。

『本草綱目』では、

「氣味」酸、平、無毒。（…孟詵曰く、「正月、虎を食らう勿かれ。神を傷つく」と。李時珍曰く、「虎肉、土氣を作し、味

は甚だしくは佳からず。鹽食して稍く可なり」と）。

という。孟詵は「正月に虎を食べてはいけない」という。『本草蒙筌』の豹肉に「正月食らう勿かれ（正月建寅、故に虎豹の肉を食らうを忌む）」とある。建寅は陰曆正月の別名。寅に虎という連想だろう。

さらに『本草綱目』から、

「主治」悪心嘔かんと欲す。氣力を益す。多唾を止どむ（別録）。之れを食すれば瘡を治す。三十六種の精魅を辟く。山に入れば、虎見て之れを畏る（孟詵）。

『続漢書』礼儀志、大讎の方相氏に従う十二獸の一、肺胃も「虎を食らう」とされる。鬼は虎をおそれる。その虎をたべることによる鬼がよりつかず、また虎をもさけうという。またここでは三十六種精魅とあり、鬼の種類は格段に多くなっている。

血

『本草綱目』では、

「主治」神を壮んにし志を強くす。

という。「神」や「志」は精神や氣力に関わるが、血はそれをつよくさせる。エネルギー源のような感覚がある。血は神かみの活力をたかめるために神にささげられていた。ここでもそういった感覚が残存している。

〔時珍曰〕、獵人、李次口云う、「虎の心血を刺して之れを飲まば、能く神志を壮んにす」と。又た『抱朴子』に云う、「三月三日、殺して虎血を取り、生駝血、白虎の頭皮、紫綬きんぎょ、履組（送）、流萍、合わせて之れを種う。初め草を生じ胡麻みじこの子の似し。即ち此の実を取り、之れを種う。一たび生じ輒ち一たび異なるも、凡そ七たび之れを種え、その実を取り合わせて用うれば、以て形を移し貌を易かうるべし」。

獵師が虎の血を飲むことは実経験にもとづくのであろう。『抱朴子』は内篇卷十九遐覽篇「白虎七变法」からの引用。ここでは虎の血を直接、服用する事はない。しかし上記の不思議な方法で得られた草の実を飲めば容貌が変わるとされる。『抱朴子』の原文はこのあと「上下自在に空を飛べる」と記すが『本草綱目』では省略されている。

牙

『別録』では「丈夫の陰頭の瘡及び疳癭を治す」とある。陽で陰を治療するのだろうか。

『本草綱目』では、
 （孫思邈）（勞虫を殺し、獼犬の傷、発狂を治す。末こに刮かり、酒もて方寸の匕を服す。

という。虎と犬の關係は他にもみえる。猛獸としての實力は虎は犬

よりも格段に上である。ゆえに犬の咬み傷に、虎の武器である牙を使用した薬が威力を発揮する。この発狂は狂犬病かもしれない。

（時珍）〔附方〕（新一）白虎風痛（大虎牙一副（四個）、赤足蜈蚣十条（酒もて浸すこと三日、晒干す）、天麻二両、乳香、没薬各一両、麝香半両、末と為し、毎に服すること二錢、温酒もて下し、一日三服す（『聖濟總錄』）。

というような処方（注）が記されている。前掲『葛洪肘後備急方』巻七「療獼犬咬人方」にも虎の牙を刮かって服用することが記される。

鼻

虎の鼻は魔除けとされる。『別録』（『新修本草』所引）では「癩疾、小兒の癩癧を治す」とある。『新修本草』の「俗云」では頭骨と同様に戸上に懸けるとされる。

鼻、戸上に懸ければ、男児を生ましむ。（『新修本草』虎骨〔俗云〕）

男児を生むのは、虎が陽なので男（陽）を生むのであろう。また「鼻は漢時代の觀念で初出、始祖の意味があり、血族が始めてうまれ、繁栄してゆくという意味合いをもつ語であった」とされることも関連するかもしれない。

『本草蒙筌』は、

鼻、戸上に懸ければ、男を生む（孕婦、虎の鼻を以て門戸の上

に懸く。男を生むを主る。癩疾仍ち治す。と述べ、妊婦が戸の上にかけることを記す。

『本草綱目』では、

〔主治〕癩疾、小兒驚癇（別録）。戸上に懸くれば、男を生ましむ（弘景）。（〔時珍曰〕按ずるに『龍魚河図』に云う、「虎の鼻、門中に懸くること一年、焼きて屑と作すを取り、婦に与えて飲ましむれば、便ち貴子を生む。人及び婦に知らしむる勿かれ。知らば則ち驗あらず」と。又た云う「門上に懸くれば官に宜ろし。子孫、印綬を帯ぶ。此れ古は胎教、虎豹を見、皆な其の勇壯を取らんと欲するの義と同じなり」と）。

ここでは妊婦に虎の鼻を服用させている。また人や妊婦に知られてはいけないという。また古に胎教で虎や豹をみせると勇壯になるという言い伝えがあったらしい。

皮

『本草綱目』に、

（一名鼠毘。『莊子』に見ゆ）。〔主治〕瘡疾（蔽器）。邪魅を辟く（時珍）。〔發明〕（〔時珍曰〕、按ずるに応劭『風俗通』に云う、「虎は陽物、百獸の長、能く鬼魅を辟く。今人卒かに悪病に中らば、皮を焼き之れを飲む。或いは衣服に系くれば、亦た甚だ驗あり」。

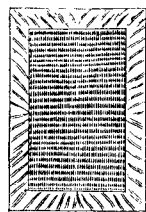
とある。ここでもまた虎が薬物とされる。皮は焼いて服用された。焼くと悪臭を放ち、それにより鬼を駆逐するのだろう。『本草綱目』所引『風俗通』は「悪病」に効くとする。しかし『風俗通』の原文には「病」の文字がない。いずれにしても特定の病気をなおすのではなく、鬼を追いはらう。薬物を身につける風習は『山海経』に「佩」や「服」としてみえる。

『起居雜記』に云う、「虎豹の皮上に睡らば、人の神をして驚かしむ。其の毛、瘡に入らば大毒有り」。

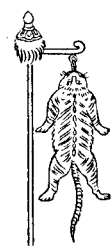
ここでは虎の皮は内服しない。虎豹の皮のうえに眠ると人の神魂を驚かすという。虎が鬼（靈魂）をおいはらうので睡眠中に出游した人の靈魂まで驚かしてしまうのであろう。



虎皮を敷き存想する
『太上除三尸九虫保生經』



羊皮で虎のおおう。羊皮は虎の皮の縁飾り。
虎植は虎の皮の縁飾り。
(『礼記図』)



虎皮 (『礼記図』)

唐、『杜子春伝』には「一虎皮を取り、西壁に鋪き、東向して坐す」とある。西というのは白虎が西に配当されるからであろう。⁽³⁸⁾

皮をしく話は『詩経』秦風、小戎、「文茵暢轂」の毛伝に「文茵は虎皮なり」とある。鄭箋は「文茵は虎皮を以て茵と為す。茵は車席なり」と述べ、車の座席に敷くことがわかる。劉熙『釈名』積車第二四は「文輻は車中の坐する所の者なり。虎皮を用い文采有り」と述べる。後世、師が敷いたことから、皋比(虎の皮)は講義の席をさした。また武将も敷いたとされる。

虎皮は戦争の際にも用いられた。『礼記』曲礼上に「前に士師有れば、則ち虎皮を載ぐ」とある。後漢、鄭玄の注は「虎は其の威勇有るに取るなり」とのべ、虎の猛威に意味をもたせている。唐、孔穎達の疏は「虎は是れ威健し。亦た兵衆の象、若し前に兵衆有るを見れば、則ち虎皮を竿首に挙げ、兵衆をして見て以て防を為さしむ」という。ここでは敵発見の合図とされている。しかし本来は敵を威

嚇し悪霊をはらうものでないかと思われる。⁽³⁹⁾『礼記』はこの後に「前に撃獣有れば、則ち貔貅を載ぐ」という。撃獣は疏に「虎狼の属」とされ、猛獣である。戦争の際、それらを放ち敵を襲わせたのだらう。

虎は四神の一、白虎(西方)であり、かつまた十二支の一(方角)としては東北だが東に収斂される(寅)の寅でもある。⁽⁴⁰⁾陰陽ではふつう陽だが陰にも配当される。

虎 睛

『別録』では「其の眼睛、癩を治す」とみえる。元、羅天益『衛生宝鑑』では、龍とのかかりで次のように説く。

龍齒、魂を安んじ、虎睛、魄を定む。此れ各おの其の類を言うなり。東方は蒼龍、木なり。肝に属して魂を蔵す。西方は白虎、金なり。肺に属して魄を蔵す。龍能く変化す。故に魂遊びて定まらず。虎能く静を専らにす。故に魄止まりて能く守る。予謂えらく、魄寧からざる者を治するは、宜しく虎睛を以てすべし。魂飛揚する者を治するは、宜しく龍齒を以てすべし。万物、成理有りて失わず。⁽⁴¹⁾亦た夫の人に在りて之れに達するのみ(『衛生宝鑑』卷八)。

これは「神気寧からず、臥すれば則ち夢に飛揚し、身、牀に在ると雖も、神魂、体を離れ、驚悸し魘多く、宵を通じて寐ねず」とい

う童生という人を治療する際の理論として示される。

ここでは龍・虎が対としてあげられる。龍と虎は西水坡遺跡において、すでに精神と肉体をつかさどるようになされた。ここでも全く同様の感覚がある。龍は魂（精神）を、虎は魄（肉体）をつかさどるものとされている。

『本草蒙筌』では「眼光」として、

形、白石の如し（凡そ虎、夜視るに、一目を以て光りを放ち、一目もて物を見る。獵人候いて之れを射るに、弩箭纒かに及び、目光便ち随いて地に墮つ。之れを得る者は、形、白石の如し）、得る者は夜、独り行き憩い臥す可し。とある。

眼光が地におち白石となる。それを身に着けると夜行しても恐れぬものはない。これは股の青銅器に数多く刻まれる邪眼と同じ効果をもつ。悪霊よけのお守りである。それは悪鬼を射すくめる猛獣、虎の睛だからである。

『本草綱目』は、

〔主治〕癩疾（別録）。瘡病、小兒熱疾驚悸（孟詵）。驚啼、客忤、疳氣、心を鎮め神を安んず（日華）。目を明らかにし翳を去る（時珍）。〔附方〕虎睛丸。小兒驚癇、小兒夜啼、邪瘧時に作る。

という。

ここでも癩癩や瘡などの治療にもちいられる。虎睛丸はとくに小兒の夜泣きや瘡にもちいる。瘡は邪瘧とされ邪鬼がひきおこす。邪瘧の注は『聖恵方』を引用する。

生虎睛一枚、臘月の猪血少し許り。朱砂、阿魏各一分、末と為す。端午の日に粽尖七枚を取りて和え、黍米の大に丸くす。毎に綿もて一丸を包み、耳中を塞ぐ。男は左、女は右。『聖恵方』。ここは耳の中に丸薬をつめる。死者の耳にも瑱みんだまをつめ、悪霊が耳の穴から遺体に侵入するのを防いだ。ここも同様の感覚だろう。臘は陰暦十二月で神々の集まる月。端午の粽は悪霊よけと関連する。茅でまいたものもある。茅は『日書』などで悪鬼を封じ込めるために使用されたもの。粽は本来、悪鬼をまいて食べてしまうという意味ではないかと思われる。

『本草綱目』は虎睛のあとに琥珀を別項目としてたてて。まづ『本草蒙筌』の注にもひかれた感器の「目光が地におちて白石となる」説をあげる。その後すぐ、宗爽の所論を紹介する。

陳氏の所謂、乙骨及び目光、地に墮つるの説、終に誣を免れざるなり。

宋、寇宗奭の『本草衍義』巻十六、虎骨には「必ず之れを人に得、終に其の誣する所を免れざるなり」としるされる。要するに人のつ

くりあげたでたらめだという。

これに対して李時珍は、

乙骨の説、怪しむに足らず。目光の説、亦た猶お人縊死すれば則ち魄、地に入る。随いて即ち之れを掘るに、状、麩炭の如きの義のごとし。

と強弁する。寇宗奭は、迷信を打破しようとする立場だが、李時珍はそういった迷信に近い説を「怪しむに足らず」と否定しない。このあたり李時珍の『本草綱目』のスタンスが感じられて興味深い。李時珍は明らかに鬼あるいは鬼に起因する病を肯定している。その証拠に『本草綱目』には悪霊の「罔兩³⁸」や木の精の「彭侯」までがとり上げられている。またここに引かれる魄のことは『本草綱目』巻五十二、人魄に次のように記される。

〔集解〕 此れ是れ縊死の人、其の下に物有り麩炭の如し。即時掘り取り便ち得。稍や遅ければ則ち深く入る。掘らざれば則ち必ず再び縊^{くびく}るの禍有り。蓋し人は陰陽二気を受け、形体を合成す。魂魄聚まれば則ち生まれ、散ずれば則ち死す。死さば則ち魂、天に升り、魄、地に下る。魄は陰に属し、其の精、沈淪し地に入り、化して此の物と為る。亦た猶お星隕ちて石と為り、虎死して目光地に墜ちて化して白石と為り、人血、地に入りて礫と為り碧と為るの意のごときなり。

〔主治〕 心を鎮め、神魄を安んじ、恐怖、顛狂を定む。磨きて水もて之れを服す（時珍）。

心を鎮め、魂魄を安んじ、恐怖や突然の発狂を落ち着かせる。いずれも精神・魂にかかわるものに効果をもつ。魂魄の病は、死者の魄が地中にしみ入って物質化した薬物によって治療する。魄から薬物がとれるとするが、その根拠が、虎の目光が白石と化す事であった。ゆえに白石の説を荒唐無稽とする寇宗奭には、つよく反駁をくわえる必要があった。なお虎の目光が石となることの根拠は、夜空に光り輝く星が隕石となる、つまり、光りが石に変化する事による。それはまた人血が燐となり地に入りて碧玉と化した故事とも通じるといふ³⁹。

『本草綱目』は先行文献の集積の上に李時珍が意見を開陳する事が多い。ところがこの部分には先行文献が全くない。つまり人魄を薬用にもちいることは李時珍の独創といえる。それだけにこの記述には李時珍の思想が看取されるのである。

尿

『別録』では「悪瘡を治す」とされる。『本草蒙筌』では「尿、瘡口を封ずれば毒を殺す。鬼魅も亦た駆る」。『五十二病方』や『葛洪射後備急方』などでは、尿の類を用いる治療法が多く記される。悪瘡は鬼がその中に入り込んで生ずる。そこに尿などの悪臭の

する汚物を塗りつけ、鬼を追い出そうという発想である。『韓非子』内儲説下には、鬼を見たことを祓除するために五牲（牛・羊・豚・犬・鶏）の矢（屎）を塗りつけることを記す。そこではまだ虎の屎は使用されていない。

『本草蒙筌』では「鬼魅も亦た駆る」と「亦た」の文字が使用されている。ここでは鬼魅が悪瘡の理由であるという意識がすでに消えかけている。悪瘡を治療できるが鬼魅をも退治できるという感覚である。

『本草綱目』では、

〔主治〕悪瘡（別録）。鬼氣（蔵器）。瘰疽、痔漏を療す。焼きて研し酒もて服す。獸の骨髄を治す（時珍）。〔附方〕（旧一）。瘰疽、手、足、肩、背に着き、累々として米の如く起つ。色白し。之れを刮らば汁出で、愈えて復た発す。虎の屎の白き者、馬尿を以て之れを和し、晒し干し焼きて灰にし、之れを粉にす（千金）。

という。虎の屎に馬尿を混ぜ合わせてもちいる。

屎中の骨

『別録』に「其の屎中の骨灰は、悪瘡を治す」とある。『本草綱目』は、

〔主治〕屑と為し、火瘡を治す（別録）。破傷風（時珍）。

〔附方〕（新一）。断酒（虎の屎中の骨、焼きて灰にし、酒もて方寸の匕を服す。則ち飲まず）（千金方）。

骨灰は骨屑ともされるが、虎の屎中にあった未消化の骨である。屎を薬用にしたことから使われただしたのであろう。

虎鬚

虎の鬚は歯痛を治す。『新修本草』に「俗に云う：鬚は歯痛を療す」とあり、『本草綱目』も「鬚〔主治〕歯痛」としるす。これには出典がある。

仙人鄭思遠、常に虎に騎る。故人許隱、歯痛み治せんことを求む。鄭曰く、「惟れ虎鬚を得、熱して歯間に挿すに及べば、即ち愈ゆ」。鄭為に数茎を抜き、之れに与う。因りて虎鬚、歯を治するを知るなり（唐、段成式撰『酉陽雜俎』廣動植、毛篇）。歯痛に関しては甲骨文にすでに齧齒の記載があり、祖霊の祟りとされていた。歯痛は悪鬼の仕業ということになる。その悪鬼を虎の鬚で突き刺して殺す。虎の鬚はかなり硬そうである。これもまた虎が鬼に勝つということの延長線上にある。

胆

『本草綱目』では、

〔主治〕小兒驚癇（蔵器）。小兒疳痢、神驚き安んぜず、研し

水もて之れを服す（孟詵）。

これもまた小児の精神に關する病である。

腎

『本草綱目』では、

〔主治〕瘰癧（〔時珍曰〕千金、瘰癧を治するに、雌黄芍薬丸

中に之れを用う。袁達『禽虫述』に云う、「虎腎、腹に懸け、

象口、頭（おひら）を隠す」と。

とある。

瘰癧は首や腋のしたのリンパ腫が化膿したものとされる。『禽虫

述』では「虎の腎臓を腹に懸ける」という。これは鼻を戸口に懸け

るのと同様の意味を持つのであろう。

『本草綱目』では、ほかに「肚」が「〔主治〕反胃吐食」として

記されている。

おわりに

虎の薬物としての効用は、「猛獸の虎が鬼を食べること」を軸と

して展開していった。そこに陰陽、五行（四神）、十二支（寅）と

いう互いに異なった理論がからみあい、非常に複雑なものとなる。

薬物として虎骨は実際に効果を發揮する。しかし『本草綱目』など

の本草書には鼻を門戸に懸ける等の呪術的な効用が数多くしるされ

ている。

『原色和漢薬図鑑』⁽⁴⁰⁾下は、虎骨を薬用とするための製造法を詳細

にする。また薬理作用として、「虎骨膠は関節炎に顕著な抗炎症作

用があり、消腫の効がある。また持続的な鎮痛作用をもっている」

とのべている。さらに薬能に、「虎骨は筋骨を強健にし、痛みを止

める効があり、肝腎の虚寒、風湿による足膝の疼痛を治す要薬であ

る。また驚悸を鎮める作用がある」と記している。

薬学の書物であるため、薬用としての成分と臨床例が中心である。

ここでは「虚寒」という『黄帝内经』にもとづく中国医学の枠組み

にはのっとるものの、もう一つの枠組みである鬼（悪霊）が病気を

引き起こすという観点は完全に無視されている。本草書であれほど

多く書かれていた鬼に關する記述は一言もあらわれず、みごとに消

し去られているのである。

たしかに現代医学の観点から考えれば、そういったものは迷信に

すぎず、触れないことが科学的態度なのだろう。しかし、病はたん

に物質としての身体が病むことではない。中国古来の文化に根ざし

た精神的なものも重要な影響を与えている。「鬼が身体に侵入して

疾病をおこす」と信じていた古代の中国人にとっては、鬼を退治す

るという薬効は確実に効果をあげたと思われる。

上記に考察を重ねたように虎が薬物として利用されたのは、虎が

悪霊を食べるといふ觀念が増幅されたものであった。この觀念なしに虎の骨が薬用とされることはなかつたとおもわれる。これは決して豚の骨と虎の骨の効能を比べた結果、虎の骨を服用するようになったものではないだろう。

本草書には『新修本草』の「俗に云う」のように、俗説が多く流れ込んでゐる。中国でも応劭の『風俗通』や王充の『論衡』のように知識人が俗説を痛烈に批判したものは多い。俗説は、無知と迷信のかたまりのように考えられている。しかし、むしろ俗説のなかにこそ古来の思想が忠実に伝えられていることが多い。本草書はその俗説をもとり込んで、一種、混沌たる一大体系を打ち立てた。それは矛盾をふくみ、系統だてて理解しづらいものではある。しかしこのような本草書こそがむしろ中国の医学を総体として理解したものだといえるだろう。

その本草書にもとづきながら、鬼系列の病因論をあえて排し、成分だけで薬効をとき、中国医学を論じようとする。そこには何か重大なものが欠落しているように思われる。

注

(1) 「河南濮陽西水坡遺址発掘簡報」(『文物』一九八八年、第三期)、一九八八年河南濮陽西水坡遺址発掘簡報」(『考古』

第12期、一九八九年) 参照。

(2) 『左伝』文公十八年「饗饗」の杜預の注に「貪財為饗、貪食為饗」とある。また清、趙翼『陔余叢考』「饗」参照。

(3) 白川静『字統』(一九八四年、平凡社)二七五頁、虎に「饗饗は虎を文様化した、左右の展開図である」とみえる。

(4) 『太平御覽』卷九五四所引『風俗通』の逸文に「墓上に柏を植え、路頭の石虎。『周礼』に方相氏、城はかに入り饗象を馱つ。饗象好んで亡者の肝脳を食らう。人家常に方相をして墓の側に立て以て之れを禁禦せしむる能わず。而して饗象、虎と柏を畏る」とある。

(5) 『仙の意味の再検討と道教における仙の位置付け』(大形、科研報告書、一九九四年)二二一〜三頁参照。

(6) 晉、司馬彪撰、梁、劉昭注。

(7) 前掲『字統』八七七頁、龍に「…この種の冠飾は鳳・虎の卜文形にもみられるもので、靈獸たることを示すものであり、四靈の觀念がこれらの字形の成立した当時において、すでに胚胎するものであることが知られる」とある。

(8) 林巳奈夫『龍の話』(中公新書、一九九三年)。出石誠彦『支那神話伝説の研究』(中央公論社、一九七三年)に「龍の由来について」・「鳳凰の由来について」がある。

(9) 江上波夫監修『聖獸伝説』（講談社、一九八八年）は、龍・

鳳凰・獅子・麒麟等は大きくとり上げられる。虎に関しては『虎と麒麟とライオン』（二〇九頁）で「虎は昔、聖獣だったけれど、獍猛さが災いして一段地位が下がった（陳舜臣）」という認識である。

(10) 孔子過泰山側、有婦人哭於墓者而哀、夫子式而聽之、使子路問之曰、「子之哭也、壹似重有憂者」、而曰、「然、昔者吾

舅死於虎、吾夫又死焉、今吾子又死焉」。夫子曰、「何為不去也」。曰「無苛政」。夫子曰、「小子識之、苛政猛於虎」

（『礼記』檀弓下）。

(11) 劉昆：先是崑、詣馭道多虎灾、行旅不通、崑為政三年、仁化大行、虎皆負子度河（『後漢書』卷七九上、儒林列伝）など多数。

(12) 「骨灰」は大観ほかは「骨為屑」とする。虎が禽獸を食べた際の未消化の骨をさす。

(13) 邪氣と邪鬼の関連については、拙稿「氣系の病因論」（『人文学論集』第一三集、大阪府立大学人文学会、一九九五年）、「鬼系の病因論」（『大阪府立大学紀要』四三号、一九九五年）参照。

(14) 拙稿「被髮考―魂と髮型の関連について」（『東方宗教』第

八七号、日本道教学会、一九九五年）参照。

(15) 『重修政和証類本草』は「俗方に云う」。

(16) 「汝南桓景、随費長房遊学累年、長房謂曰、九月九日、汝家中当有灾、宜急去、令家人各作絳囊、盛茱萸以繫臂、登高飲菊花酒、此禍可除」。なおこの話は梁、宗慄『荆楚歲時記』九月九日にも引用されている。

(17) 前掲『字統』三一五頁。

(18) 前掲「被髮考」参照。

(19) 出典は前漢、劉歆撰『西京雜記』卷下。原文は「李広与兄弟、其獵於冥山之北、見臥虎焉。射之一矢即斃、断其髑髏、以為枕、示服猛也。铸銅象其形、為搜器、示厭辱之也」。

(20) 『史記』卷一百九、李將軍列伝ほか。

(21) 『史記』刺客列伝。前掲「被髮考」注24参照。

(22) 二六四〜五。

(23) ？〜一五九。後漢の人。『後漢書』卷六四。

(24) ほかに「虎嘯而風冽、龍興而致雲」（『漢書』王褒伝）、「虎嘯風生、龍騰雲起」（『北史』張定和伝の論）」とある。

(25) 拙著「不老不死」（『講談社現代新書』一九九一年）第四章、不老不死の仙薬、および拙稿「丹毒で命を落とした人びと」（『しにか』一九九五年、11月号、大修館書店）参照。

- (26) 『サンゴ礁をわたる碧の風―南西諸島の中の弥生文化』 大阪府立弥生博物館、一九九四年、二六頁に「イヌ犬歯・サメ歯模造品を連ねた首飾り(沖繩県シヌグ草遺跡)」の例がある。
- (27) 前掲『不老不死』一五八頁参照。
- (28) 本田濟訳注『抱朴子』内篇(平凡社、東洋文庫、一九九〇年)四〇三頁に「『図経衍義本草』巻一九に、ぞうりの鼻緒を薬用にする説あり」と述べられる。
- (29) 前掲『龍の話』一二六頁。
- (30) 『風俗通』巻八「桃梗・葦交・画虎」は、「虎者陽物、百獸之長也。能執搏挫銳、噬食鬼魅(拾補曰、統漢志注、能擊鷲性食魑魅者也)、今人卒得惡遇(拾補曰、疑衍)、燒倍(拾補曰、忤同)虎皮飲之。擊(拾補曰、『御覽』繫)其爪(拾補曰、『太平御覽』作其衣服)、亦能辟惡。此其驗也」につくる。
- (31) 『日書』849反面/3には、抜け毛や家畜の毛を焼き、その悪臭によって鬼をはらう方法がしるされる。
- (32) 『山海経』には、薬物の服用法として「食」が七十四回、「服(外服)」が二十一回、「佩」が六回、はかに席く、浴びる、塗る、飲むが一回ずつみえる。拙稿「『山海経』の「山経」にみえる薬物と治療」(坂出祥伸編『中国古代養生思想の総合的研究』平河出版社、一九八八年)参照。
- (33) 三輪正胤「偽書の歌論―『愚秘抄』のばあい―」(『歌論の展開』―和歌文字論集7―風間書房、一九九五年)四、虎皮を敷く老翁、五、化人、人丸も虎皮を敷く、に虎の皮を敷く意味について考察されている。
- (34) 『礼記図』の旌など毛髪状のものも悪霊ばらいである。前掲「被髮考」参照。
- (35) 前掲三輪論文。
- (36) 『本草蒙筌』「虎骨」所引の『衛生宝鑑』は『莊子』知北遊篇にもとづき、「不失」を「不説」に書き直している。
- (37) 虎睛丸は小児科の書物、宋、闕名撰『顛顛経』に「虎睛・犀角・子牙・梔子仁・大黃」の処方のみえる。
- (38) 罔両は直接、薬用とはされない。
- (39) 『莊子』外物篇に「萇弘死于蜀、藏其血三年、而化為碧(注、精誠之至。积文、化為碧。『吕氏春秋』、藏其血三年、而化為碧玉)」とある。
- (40) 難波恒雄篇、保育社、一九八〇年、三一四―七頁。
(おおがたとおる・中国思想助教)